

二十世紀の神話

金学鉄

(日本語監修・愛沢 革)

1

鉄条網の囲いが無い強制労働収容所に、また春が来た。いま、秣槽かほぼらの中から大豆粕をつまみだして一生懸命頬張っているのは林一平リンイチヘイである。彼はもと、文学雑誌『アリアルン』のバリバリの編集員であった。だが現在は、飢えからくる栄養失調のために全身がひどく浮腫むくみんで、元の顔形さえ見分けにくくらいだった。牛小屋の外では、先に大豆粕を食ったバイオリニストの蔡チが、熊手で牛糞を掻き出すふりをしながら、代わり番で見張りをしてくれていた。

急に蔡が咳払いをした。「敵見ゆ」の警報だった。つづいて「猿公えんこう」の甲高い尖り声が聞こえてきた。猿公とは、監督補助員の成なりの綽名。彼は、かなり遠くから蔡に声を張りあげて問うているらしかった。何を言ってるのか、牛小屋のなかではよく聞き取れない。

「はあ、もうじきです」

蔡の返事をする声だけがはつきりと聞こえた。

飼料の盗み食いをしていた一平は、外で人声がすると、大急ぎで口の中のものを秣槽かほぼらの中へ吐き戻した。そして手に持った火掻き棒かきぼうで秣かほをよく掻き混ぜてやるふりをした。

「郭五柱クワゴシュ」*という綽名なづなのつむじ曲まがりものの黒牡牛は、食い気がついたのか秣槽かほぼらに鼻面はなめんを突っ込んで、喰うのに余念が

なかった。が、もう一頭の、片っ方の角に青色のペンキを塗った「申進士」*と呼ばれる長者ふうの黄牝牛は、食欲がないらしくさもまずそうに下顎を動かしながら、いささか怪訝な顔で一平の挙動を見つめた。「もう召し上がりませんか？」と訊いてでもいるようなまなざしだった。差し向かいで食事をしていた嫁の父親が、急に箸を置いて退って何かほかのことをやりだしたら、さぞかし人間たちもこのようなまなざしでその挙動を見つめることだろう。

この牛小屋にはもと、七頭もの牛が飼われていたが、その半分以上の五頭はすでに冬のあいだに飢えて、疲れて、病んで、つぎつぎに斃れていった。飼料不足のおりから、無理な駄賃稼ぎをやらされたのだった。しかし運よく生き残りえたこの二頭の一つもものたちも、それぞれ垂木のような肋骨が皮の上にくっきりと露われていた。

見張りに立っていた蔡が、首根つこの折れた熊手の柄を引きずりながら、のろのろと牛小屋の中に入ってきた。

「猿公の野郎、何でまた？」と一平が眼を光らせると、蔡は気のなきそうな声で、

「さっさと出て来いってんだらう」

それからちよつと間をおいて、付け加えた。

「ちよちよこ走り、またよそへ回っていったから、急ぐことはない」

蔡もものすごく浮腫んでいるので、かぶっている帽子が

と冗談を半々にあやまった。

「申君、すまん。かんべんしてくれよ」

それから蔡の方を振り向いて、

「タバコ？」と遅ればせの返事をした。
一平は、秣槽から少し離れたところに据えてあるひしゃげた空箱の方へ歩み寄った。それへどっか腰を下ろすと、さっそく手垢でたらから光る煙草袋を取り出した。彼が煙草袋の紐を解くあいだ、蔡はあたかも己が一生の運命がその紐の端にぶら下がってでもいるかのように、不安なまなざしで一平の指先をじつと見つめた。

煙草袋をはたくと、灰色の桐埃が半分くらい混ざった葉タバコの屑が出てきた。紙巻きタバコ一本たっぶり巻けるほどの分量だけ残っていた。それがいわば全財産だった。鷹揚な一平はその全財産を、煙草袋ぐるみ蔡に手渡した。

「これで、蔡君、でかいやつを一つ巻いてくれ。記念すべき最後の一本をよ。僕は後で一口吸わせてもらえば、それだけっこう毛だらけ猫灰だらけ」

蔡はすまない気がしてちよつとためらったが、思いなおして、受け取った。煙草袋を丹念にはたいて、すぐでかい最後の一本を巻いた。噛んで、火打ち道具を取り出した（マッチが配給制になってからこの封建時代の遺物は、急に流行りだしたのだった）。

「ほう、でっかいねえ。それで可笑しいことを一つ思い出

滑稽なくらい小さく見えた。まるで幼稚園へ通う子供のを取り上げて自分の頭の上に乗っけてでもいるようだった。

彼も一平と同じく無精髭を生やし、そして髪は伸び放題だった。それに兩人とも着ているものは、ひどい襤褸服だった。おまけに蔡は、上衣の裾から冷たい風が吹き込むのを嫌って、荒縄の上帯まで締めているので、それが彼の身なりをいつそうみすばらしいものにした。この二人も人民中国の高等教育を受けた知識人たちだといえ、おそらく誰も本当にはすまい。

癩性*の二平は手に持っていた火搔き棒を抛り出しながら腹の虫をぶちまけた。

「猿公の畜生、どうしてあんなにしょっちゅう駆け回ってばかりいやがるんだらう？ ひっくり返って昼寝でもしていれば世話はなかるうに！」

生来腹を立てたことのないのんびりした質の蔡は、ゆくりと秣切りの傍に伏せてある桶の上に腰を下ろすと、
「林君、葉タバコの屑、もうない？」そう言つて一平を眺めた。

蔡はこの強制労働収容所に収容されてから「遅まき」に煙草の味を覚えたのだった。今ではもう煙草なしでは夜も日も明けぬ始末だった。

秣槽の前の一平は、節くれだった手で「申進士」の眉間を搔いてやりながら、大豆粕を盗み食いたことを、本当

したよ」と一平は、さも可笑しそうに自分から先に笑つて、こんな話をした。
「僕がまだ子供だった頃の話だが、遠い田舎に一人の従兄が住んでいた。その従兄は、大人たちの呑んでる煙草が、自分も一度呑んでみたくてたまらない。で、ある日、こっそり刻みタバコを一袋買った。それを隠し持って裏庭へ回ると、オンドルの煙突の陰に究竟な場所を見つけた。あとでも知らぬ伯母が、瓢*を持って、灰汁か何かを汲みに行った。従兄を見つけると、びっくりして大声を上げた。何事が起つたのかと思つて家中の者がみんな足袋はだしで飛び出してきた。見ると、呆れてものも言えない。当時十五歳になるその従兄が氣を失つて地べたにひっくり返っているんだ。そしてそのすぐ傍には、これはまたでっかいラッパほどもある紙巻きタバコが一本転がって燻ぶっているんだ。なんとも無茶な！ 刻みタバコを一袋そっくり古新聞の切れで巻いて、それをスパスパやったからたまらない。たちまちぼうつとなつて、ぶっ倒れちゃったんだ」

物憂げに笑いながら、蔡は黙つて吸いかけの煙草を一平

郭五柱…伝説上の盗賊・義賊の名。民俗芸能などで庶民に人気。
進士…科擧の小科に合格した者。

癩性…すぐ激するような性質。また、特別きれいな好きなこと。
瓢…バガチ。ひさご。罌(ふくべ)ユウガオの果実を二つに割り中身をえぐって乾燥させ容器として用いる。

に差し出した。まだ半分たつぷり残っている。一平はいちおう辞退して、蔡にもう少し吞ませてから受け取った。そして煙を吐き出しながら、相談でも持ちかけるような調子で、

「これからは僕らも、代用品で我慢をしなきゃなるまいね？」

すると蔡は、肺の中に閉じ込めた最後の煙を逃さないために、口をしつかりつぐんだまま、「アム」。返事にならない返事をした。ほかの者たちがみんな代用品の乾し草で我慢をしているからには、こちらでも代用品で我慢をせねば大義名分が立たんとでもいうのか？

一平が先に腰を上げた。そして地下足袋の踵で吸殻を踏んづけた。蔡も手探りで熊手の柄を引き寄せると、それに随うようにしながらだるそうに腰を上げた。

2

毛××は一足飛びに共産主義天国へ飛び立って、全世界をあつと言わせようと目論んだ。で、「大躍進」なるものを考案し、また「人民公社」なるものを作り出した。その結果、中国大陸は未曾有の大飢饉に見舞われた。したがってここ、朝鮮民族自治州の百万を超える住民たちも、その災難から逃れることはできなかつた。

躍進、躍進、大躍進！

共産主義めざして

躍進、躍進、大躍進！

全中国一億の児童がいつせいに歌いわめくこの歌声と、

ただで飯食う

人民公社 いいぞ！

地上の楽園

人民公社 いいぞ！

全中国一億の児童がのども張り裂けよとばかり歌いわめくこの歌声は、高く高く天に響き、低く低く地にこだました。

ソ連を尻目にかけてチェコを遠く引き離して、凶体の大きな中国が、歩けばどしんどしんと地響きがしそうな中国が、いの一に共産主義天国へゴールインするものと、数億の人びとは信じた。

しかし幾ばくもなく、かたくなな情け知らずの現実という大官が旋毛を曲げたために、滞りなくスラスラ運ぶと見えた物事が、急にあらぬ方に拗けてしまった。

まず最初に、革命性の薄弱な女房どもが溜息をもって大躍進を迎え、お調子者の嬢どもが縁起でもない涙をもって

一九五八年、この麗しくもまたありがたき年の春、偉大な毛××主席の号令の下に、象の皮のような地皮で覆われた年老いた中国の大陸は、急にマラリアにでもかかったように、熱に浮かされてわななき震いはじめた。全国の小学生の大部が総動員され、勉強はそっちのけにして一生懸命作りあげる高さ八〇センチ、直径四〇センチの七輪型の溶鉱炉が、全国津々浦々に雨後の筍のように生え出した。家々の漆の剥げた箸や、子供の手垢のついた筆箱などがごとく登録されて、人民公社の共有財産となった。毎日毎日ぶつづけで二十時間ずつ働くという大躍進時代の英雄たち——奇蹟の創造家たちが、毛主席に拜謁するために、造花で胸を飾って続々と上京した。そして謁見の栄をかたじけなくした「小英雄」たちは、帰ってくるためいめいの新しい感激で、巫女の降神棒*のように震える筆を揮って「毛主席と握手した手」という感想文を書きあげ、それぞれの新聞や雑誌をにぎわした。ソビエト人の顧問や専門家たちの背中にはどの背中にはもみな「保守主義者」という恥ずべきレッテルがべたべたと貼られた。現代科学と専門的技術がごとくお笑いぐさとなつて、こそこそと穴にもぐりこんだ。毛××思想だけあれば、もうこの世の中でできないことは何一つない、そういう時代とはなつた。

千軍万馬 前へ進め

人民公社を奉迎した。人民公社では、三里四方に住む何百もの家の子供らを一人残らず駆り集めて、中心部落に設置した臨時託児所と、バラック建ての幼稚園に収容した。そのため、わが児の顔が見たくて仕事もろくろく手につかぬ馬鹿な母親たちと、わが児のことを案じて夜の眼も合わせられぬ因果なお袋たちが、一里も一里半もある暗い夜道をこけつまるびつ、わが児たちに逢いに来た。幼な児たちが缶詰の中の鯛のように、ぎつしりつまって重なり合つて、窮屈そうに寝ている様子を隙間から覗いた。そして赤ちゃんの呼吸がつかまつたらどうしようと心配する母親があるかと思えば、坊やおなかを丸出しにしたと嘆きながら愚かな涙をしきりに拭う母親もいた。いくら覗きまわってもわが児の姿の見当たらない母親たちは、「無用の者立ち入るべからず」の札をうらめしげに見上げながら、門框にもたれて呻き、地面がへこむほど深いため息をついた。この母親たちはふだん毛思想の勉強を怠つたため、みんな時代遅れになつていたので、大躍進時代の赤子たちは襦袢を締めたまま兵営生活をするという、この斬新な現実をすぐには受け入れられなかつたのである。

時が経つにつれて虚熱が下がり、ヒステリーの発作もしだいにしずまつていった。と、すぐに不吉な兆しがつぎつ

巫女の降神棒…ムーダンが神将を招くときに用いる棒。